死神のパートナーですが何か？

島田海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神のパートナーですが何か？

【Ｎコード】
Ｎ５１７３ＢＡ

【作者名】
島田海斗

【あらすじ】
大学１年生の武田が自分のアパートに戻るとゴスロリの格好をした金髪ツインテール少女がいた。そしてとある手伝いをして欲しいと頼まれる。

「ふざけんなよ！何の恨みがあって追いかけてくるんだよ」

「お前が睨み付けてきたからだろ」

「睨みつけてなんかねぇよ」

不良に追いかけられている目つきの悪い少年は、武田重規。近くのアパートで一人暮らしをしている大学一年生だ。昔から眼つきが悪く、よく不良に絡まれている。

１０分くらい走っていると不良は追ってこなくなった。

「はぁ、はぁ、クソ！！なんでいつもこんな目に」

その後はゆっくりと歩きながら、アパートへと帰っていった。

アパートは、少し古いが学生が住むにしては綺麗な方だと思う。外付けの階段から2階に上がって一番奥の部屋が武田の部屋だった。

鍵をガチャリと開けて、中に入るといつも通り、真っ暗な玄関だった。

玄関の電気は勿体無いので点けない。リビングの扉を開けて電気を着けると・・・・・・！？

ゴスロリの格好をしている金髪ツインテールの少女が、ベットで眠っていた。壁側を向いていて顔は見えない。

「え、え？誰？」

武田が少女の顔を見ようとベットの方に行くと少女がモソモソと動き出した。

「ん？う、う〜ん。やっと帰ってきたか。まぁとにかく座れ」

そう言ってからベットの上に座り直した。どうやら本格的に寝ていたわけではないようだ。

「お、おい。お前誰だよ」

「その前に私のために死んでくれ」

いきなりそんな事を言われて、訳の分からない武田の眉間に銃が突きつけられた。

「は？何だよこの銃」

「さっきも行ったただろ私のために死んでくれ」

少女は銃の引き金を弾いた。バーンという大きな音が部屋に鳴り響き、それと同時に武田の体が床に倒れた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー

しばらくすると武田が目を覚ました。

「・・・・・・ハッ！！あれ？俺撃たれて死んだのに」

「おめでとう。今日から君は私の下僕だ」

「おい、何が下僕だ。俺のこと殺そうとしたくせに！！」

武田はそう言って少女の胸倉を掴んで、殴ろうとしたが殴らなかったというか殴れなかった。
少女を殴ろうと思って、拳を作っても腕が動かない。

「クソッ！！何で腕が動かないんだよ」

「当たり前だろ下僕が主人を殴れるわけが無いだろう」

このどうしようもない怒りを思いっきり壁にぶつけた。ドーンという音が鳴り、壁には大きな穴があいた。

「さっき撃ったのはストレーションという弾で撃たれた人間は撃った人間の下僕にならなければならない」

「何で俺がいきなり名前も知らない奴の下僕にならないと駄目なんだよ」

「お前私から離れると死ぬぞ」

武田はその言葉を信じずに部屋を出て行った。

「あほうめ」

外は晴れていて星が綺麗に見えた。風が少しあったが悪くない風だった。
コンビニに向かって歩いているといきなり心臓が痛くなった。
そのままうずくまって1歩も動けなくなってしまった。

「な、何だよ・・・・・」

後ろから誰かの足音が近づいてきた。痛む胸を押さえながらそちらを見るとあの少女だった。

「だから行っただろう」

そして少女が近づいてくるにつれて、胸の痛みがだんだんと楽になってきた。

「私は死神見習いのアリサ。私の手伝いをして欲しい」

「はぁ、はぁ、はぁ、死神見習い？」

「そう、死神ではなくあくまで見習いだ。そして私達に出された使命は１００個の人間の魂を回収すること」

「断る！！」

「そうか、じゃあ貴様はもう用済みだ。今度こそ殺す」

「ごめんなさい、やっぱり手伝います。っていうかてめぇがこんな体にしたくせに偉そうなんだよ」

「当たり前だろ。お前は下僕だからな」

その時周りの空気が突然冷たくなった。

「お客様のご登場だよ」

「お客様？」

アリサは闇の広がる方へ指を刺している。指を指している方向を見ると大きく丸っこいヘドロみたいな化け物が歩いてきた。

「アァァァァァぁぁア」

武田は、その化け物を見たとたん体が震え始めた。本能的に殺されると察したのだ。

「な、何だよ。あいつは」

「人間、いやかつて人間だった妖怪みたいな物かな」

冷静にそう分析するアリサ。

「は、早く倒してくれよ」

武田はアリサにそう言うと、何を言っているんだという感じの顔をして武田の背中を押した。

「何するんだよ！！」

「とにかくそいつの気を引きつけろ。その間に私が倒す」

「何なんだよそれ～」

怪物は、武田を見つけるとかなり速いスピードで追いかけてきた。そして一瞬にして壁に追い詰められた。

「アァァァァァァァァぁぁア」

「た、助けて」

武田のＳＯＳは誰にも届かず、まず腕を食われた。腕のあった部分から赤い液体が噴き出す。

「グァァァァァァァァ」

痛みで意識がぶっ飛びそうだった。

怪物がまた口を大きく開けた時、アリサが飛び蹴りをして怪物の体が横にずれた。

「今のうちだ。逃げろ！！」

痛む腕を押さえながら必死に走る。

アリサはさっきは持っていなかった大きな黒い鎌を持っていた。

「まさか、いきなり会うとは思っても見なかったぞ。私に捕獲される魂第一号は貴様だ！！」

その大きな鎌を使って怪物の体を上下に分割させた。怪物の体からは汚らしい液体がドボドボと出てきた。そしてその体から青い火の

玉のような物が出てきた。

アリサはその玉を手にして、少し眺めた後に飲み込んだ。

「残り９９個」

その時、武田は近くの公園のベンチで気を失っていた。それを見つけたアリサは少し笑い、そして何もせずに闇の中に消えていった。

――

次の日、武田は公園のベンチで目を覚ました。昨日食われた右手を見ると、食われてなくなっているはずの右腕が生えていた。

「あれ？昨日の事ってもしかして夢だった？」

周りを見るとアリサもいない。

「マジか！！やったぁ俺は自由だ！！」

大声でそんな事を言うと周りの住民が集まってきた。武田はそんな事を無視して、走ってアパートに帰った。アパートの階段をダッシュで駆け上がり一番奥の部屋に走りこむ、そして利文具のドアを開けると！？

黒いゴスロリをきた少女が寝ていた。もちろんアリサだ。

武田はそれを見た瞬間、倒れてしまうかと思ってしまうほどめまいがした。

「夢じゃなかったのかよ！！！！」

アリサは武田が帰ってきたのを知っていたが、布団に包まりながら小さな声で

「これからも頼むぞ相棒」

と言ったのはアリサ以外誰も知らない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5173ba/

死神のパートナーですが何か？

2012年1月14日11時50分発行